

- 日本化学会東京 (1978)
- 6) RNase T₁の活性部位の構造
 稲垣冬彦・川野吉雄・宮沢辰雄
 高橋健治
 生体分子の構造に関する討論会 (1978)
- 7) NMR Studies on the Structure of the Active Site of RNaseT₁
 Inagaki, F., Y. Kawano, T. Miyazawa, K. Takahashi
 VIIth International Conference on Magnetic Resonance in Biological Systems (1978)
- 8) RNase T₁の活性部位の構造と機能
 稲垣冬彦・川野吉雄・宮沢辰雄
 高橋健治
 第29回タンパク質構造討論会大阪 (1978)
- 9) 蛋白分解酵素を用いた骨格標本作製法
 竹中 修・後藤俊二・相見 満
 瀬戸口烈司・渡辺毅
 第32回日本人類学会日本民族学会連合大会 (1977)
- 10) ニホンザル新生児の免疫能の獲得
 竹中晃子・竹中 修
 第23回プリマーテス研究会 (1978)
- 11) Octamer formation of Hb Izu (Macaca) β83 (EF7) Gly → Cys
 H. Morimoto and O. Takenaka
 VIth International Congress of Biophysics. Kyoto(1978)
- 12) ニホンザルペプシノーゲンの活性化, 及び遊離ペプチドのアミノ酸配列順序
 景山 節・高橋健治
 日本生化学会第51年回大会 京都 (1978)
- 13) ペプシノーゲンの活性化ペプチドの一次構造にもとづく盤長類の系統
 景山 節・高橋健治
 日本動物学会第49回大会 熊本 (1978)
- 14) カプトガニ(*Tachypleus tridentatus*)の Coagulogen の一次構造とゲル化の機構
- 高木 尚・外間安次・宮田敏行
 岩永貞昭・中村 伸・高橋健治
 丹羽 允
 第29回タンパク質構造討論会大阪 (1978)
- 15) クモノスカビ (*Rhizopus chinensis*) 酸性プロテアーゼの活性部位近傍のアミノ酸配列
 中村 伸・高橋健治
 日本生化学会第51年回大会 京都 (1978)
- 16) アズキ種子中の Bowman-Birk 型プロテアーゼインヒビターの一次構造
 石川稚佳子・中村伸・高橋健治
 渡辺一江
 日本生化学会第51年回大会 京都 (1978)
- 17) フィブリノペプチドのアミノ酸配列比較に基づくマカク属の系統解析
 中村 伸・竹中 修・高橋健治
 第23回プリマーテス研究会 (1978)
- 18) ニホンザルを用いたエンドトキシンを trigger とする凝血病態の発現機序に関する基礎研究
 鈴木宏治・江川 宏・中村 伸
 西岡厚二・竹中 修・松崎 修
 吉村 平・竹中晃子・橋本山一郎
 高橋健治
 第23回プリマーテス研究会 (1978)
- その他
- 1) 高橋健治 (1978) : "タンパク質の化学修飾—その方法と分析操作" (A. N. Glazer, R. J. Delange, D. S. Sigman 著, 高橋健治訳), 203 pp, 東京化学同人, 東京

系統研究部門

江原昭善・野上裕生
 相見満・瀬戸口烈司

盤長類の系統研究を行なうに際しては, かなり幅広い視野と研究活動が要求される。現在の部門スタッフだけで, その必要な全分野をカバーすることは, とうてい不可能であるが, 所内・外の研究者と連携して共同研究を行ない, その弊を取り

除くべく努力している。また、その際に生ずる必要性に対処して、哺乳類学・古生物学・化石生成学・地史学などにもわたって、霊長類学や古人類学を中心に、要望に応えるべく研鑽に努めている。

これらの努力の一環として、当部門では国内共同利用研究者ばかりでなく、積極的に海外の研究者との交流も怠らないよう心がけている。昭和53年8月1日から11月30日まで、ゲッティンゲン大学・理学部・人類学教室主任C・フォーゲル教授を京都大学・客員教授として、当部門で対応し、共同研究を行なった。その結果、フォーゲル教授の帰国に際し、彼は本研究所・大学院博士課程在学中の松本真（指導教官・江原昭善）のドイツにおける研究指導をひき受けることを約束し、松本は現在D A A D奨学生として彼のもとに留学が実現している。霊長類頭骨のレントゲン像による形態研究の技術を習得することになっている。

昭和52年1月から昭和54年3月まで文部省外国人留学生および日本学術振興会・外国人共同研究者として、当部門で研究に従事したインドネシア国・アングラス大学講師（上記期間中は京大・研修員）アムシール・バカル氏は、霊長類各分類群の下顎骨の形態学的研究を完成させ、京都大学・理学博士の学位を授与され、帰国した。現在アングラス大学の生物学部では、彼の処遇のために理学部長直属のResearch and Development Centreが新設され、バカル博士はその主任を努めている。そして系統部門だけに留まらず、日本とインドネシアとの共同研究や学術交流の実をあげることを計画している。

当部門が直面する重要なもうひとつの問題として、系統研究を推進させ得るフィールドの開拓および確保がある。上記アングラス大学の件もそうであるが、そのほかに南米（瀬戸口烈司）やアジア諸国（江原、野上・相見・瀬戸口）やアフリカ（江原・野上）などに、積極的に出かけて調査に従事し、部門の将来への布石とすべく心がけている。いうまでもなく、そのためには当部門だけでは完全を期し得ず、所内・外の研究者との協力が不可欠なることを言を俟たない。

最後に当部門としては、次の課題にも積極的に努力を払っている。東海地方は古くから、すぐれた先史遺跡が多いことでよく知られており、出土する貴重な人骨や獣骨の数もおびただしい。しかし

残念ながら、この地方にはこれらの資料を復元・同定し得る研究機関がなく、難渋していたが、当部門では積極的にこの問題に対応し、当地方の地域研究を推進させるべく協力している。これまで日本全体としても放置されているに等しかった先史獣骨類の研究を行なうには、まず東海地方を中心とする動・植物相の概本類を整備することが先決である。当部門の木下実技官も含めて、全員で収集・修復・復元・整備の作業に当たっている。これらの努力はやがて本研究所の情報資料センター設立の努力にもつながり、ニホンザルの古生態研究にも有益な情報源となり得ることと思う。

研究概要

1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究

江原昭善

1. ヒトおよび霊長類下顎角の発達と機能の形態学的分析
2. 霊長類の性的二型の形態学的・行動学的分析
3. 行動の解発因となるメルクマールの形態学的・系統発生的研究

2) 熱帯アジアにおけるヤセザル類の形態学的・系統発生的研究

江原昭善・アムシール・バカル

3) エチオピアにおける鮮新世一最新世霊長類の総合研究

江原昭善・野上裕生

4) 東海地方先史遺跡出土人骨・獣骨類の研究

江原昭善・相見満・木下実

5) 硬組織の形態学的研究

野上裕生

1. 歯牙・骨組織等の電子顕微鏡像に基づく形態研究
2. 家畜および野生種におけるエナメル質発達の変異
- 6) インドネシア国スマトラ島における第四紀地史研究

野上裕生

7) インドネシア国ジャワ島における第四紀哺乳類の研究

相見満

8) 第三紀食虫類・原猿類および有袋類の研究

瀬戸口烈司

1. 南米出土化石について
2. アジア出土化石について
3. 南・北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

総説

- 1) 江原昭善 (1978) : サルからヒトへの論理。アニマ No.67, 平凡社
- 2) 江原昭善 (1978) : 人類の起源を求めて。創造の世界, 第28号, 小学館
- 8) 江原昭善 (1979) : 人類の進化とその探求の意義。メジカル・ビュー Vol.14, No.2
- 4) 江原昭善 (1978) : 自然人類学。— 科学的になった人類起源論・系統論。1978年百科年鑑。平凡社。
- 5) 江原昭善 (1979) : 自然人類学。第10回国際人類学民族学会議 — 人類学に内在する自己矛盾— 第7回国際霊長類学会 1979年百科年鑑。平凡社。
- 6) 江原昭善 (1979) : アフリカ大陸におけるサル類の系統発生。アフリカ研究 Vol. 18
- 7) 江原昭善 (1979) : 猿人類の起源と系統をめぐって。科学 Vol. 49 No.11 岩波書店

その他

- 1) Amsir Bakar 1979 : Morphological Study of Mandibles of Primates Living on Siberut Island, Indonesia
- 2) M. Aimi, 1979 : A Revised Classification of the Japanese Red-backed Voles. 学位論文
- 3) M. Aimi & Sudijono, 1979 : On the problematical species *Aceratherium boschi* von Koenigswald, 1933. Bull. Geol. Research Development Centre, 1 : 37-45.

報告その他

江原昭善・木下 実 (1979) : 愛知県知多郡東浦町緒川城跡出土人骨について。東浦町教育委員会

江原昭善・木下 実 (1979) : 尊星王院跡出土人骨鑑定結果。郡上郡大和村史編集委員会
A. Ehara 1979 : On the morphological features of the nasal bones of *Simias concolor*. 昭和51~53年度文部省科研費補助による海外学術調査報告書
A Comparative Sociological Study on Coloboid Monkeys in Tropical Asia in 1976-1978

幸島野外観察施設

岩本光雄 (施設長・兼)・森 明雄

幸島地域をめぐる観光開発や観光客の増大にもなって、観察フィールドとしてのみならず、全島天然記念物としての幸島の維持には、多くの困難さが持続している。基本的には、国のレベルによる管理体制の検討なしには解決しえない問題であろう。

53年2月以来、幸島と本土の間に砂が堆積し、干潮時には広く陸続きになる現象が起こった。このため観光客が自由に渡島でき、またサルの方が観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性が生じ、そのあたりの管理に大きな努力を注ぐ必要があった。夏になって陸と島が離れたが、54年2月に再び島が陸続きになり始めた。

<群れの状況>

幸島に生息するニホンザルは、54年8月現在で95頭である。51年以来目立つようになった夏に群れのまとまりが悪くなる現象は、観光客その他の人による影響と考えられる。それを防止するためと、ここ数年、子ザルの成長の遅延と出産率の低下が目立っているためその回復をはかるためとの2つの目的で、52年7月10日~9月5日に、毎朝群れに大豆を給餌したが、53年度も7月5日~7月27日、および7月31日~8月31日の期間、毎朝大豆を給餌した。

前年の給餌の効果が現われ、53年度は13頭のアカンボウの出産があった。内訳は前年出産しなかった経産メス7頭のうち6頭が出産し、ここ数年発育の遅れていたメスが一せいに初産(7頭)を行なった。しかし、2年連続出産は見られなかつ